



第7回アジア・太平洋地域 エイズ国際会議報告

結核研究所研究部
HIV結核プロジェクトリーダー
野内 英樹

7月1日～5日 / 神戸国際会議場

アジア・太平洋地域エイズ国際会議とは

1994年に初めてのアジアとして、横浜で行われた第10回国際エイズ会議にて、北タイのHIV感染状況が報告され、アジア・太平洋地域においてエイズ地域全体にまん延し、近い将来に爆発的に拡大することが予想されました。毎年行われていた国際エイズ会議はそれ以降隔年になり、国際エイズ会議の開催されない年には地域レベルの会議が強化されるようになりました。その中で、アジアを中心に行われる会議が「アジア・太平洋地域エイズ国際会議（ICAAP：International Congress on AIDS in Asia and the Pacific）」です。アジア地域が抱える課題に焦点をあてることで、アジアの実情にあったきめ細かい対策をとるためです。当初のエイズ会議は医学研究者主体の会議であり、感染の動向や治療法についての論議が中心でしたが、感染の危険や感染者に必要なものを真に分かっている当事者が大きく参画する会議へと徐々に変化していきました。

本年7月1日から5日まで、神戸国際会議場にて、7th ICAAPが「科学とコミュニティの英知の統合 “Bridging Science and Community” 」というテーマで開催されました。HIV/AIDSとともに生きている人々（PLWHA）や被害を受けやすいコミュニティのより多くの参加を促進しつつ、科学とコミュニティそれぞれの領域で克ち取られた最新の成果と、地域そして世界で、予防、ケア、治療に対して払われたあらゆるレベルでの努力を共有することが目的です。

注目されたTB/HIV問題

今回の会議では、昨年のバンコクでの第15回国際エイズ会議で、マンデラ前南ア首相が結核の重要性を話された影響が大きく、また、先日の日本での世界結核デーでも取り上げていただいた効果もあり、TB/HIVは注目が高いトピックスでした。

具体的には、結核研究所が主催した7月2日昼の

サテライト・シンポジウムにてアジアでのTB/HIV問題をレビューして始まりしました。森亨所長とロンドン大学のPeter Godfrey-Faussett準教授が議長をされ、タイ、カンボジア、ベトナム、ミャンマーから疫学的・臨床的な問題の大きさについての現状と対策の事例が報告されました。タイからの報告では、抗結核薬と抗HIV薬をいかに併用するかについての最新の知見も紹介されました。この結果を基に今後の方策について、WHO共催やUSAID主催のシンポジウム（小野崎郁史国際協力副部長が議長で、Jintana Ngamvithayapong結核研究所講師がパネリストとして参画）にて話し合いがなされました。横浜での国際エイズ会議が契機となって1995年に設定されたタイ国北部チェンライ県での結核研究所とタイ保健省との国際共同研究が、研究面でも実践面でもこれらのシンポジウムで具体的事例を提示し貢献できたと思います。一般演題でも口頭1演題 [Trend of drug-resistant tuberculosis (TB) among Thai and non-Thai population in Chiang Rai, Thailand Abstract SaC07-01] を含む8演題を発表しました。また、立ち上げより関与しているJICAカンボジアプロジェクトと共に、ミャンマー・ベトナムからの事例も結核研究所の国際研修の卒業生によってされたことも特筆です。

結核研究所における、結核分野での経験を生かした様々なHIV関連活動

1994年の横浜会議でアジアのHIV問題が非常に課題となり、日本政府としてのエイズ分野の国際協力への取り組みが、結核分野の経験を生かして始められました。厚生労働省の支援の下、エイズ予防財団と共同でアジア地域エイズ専門家研修を結核研究所にて、1994年度に第1回を開催して以来実施してきております（今年で、第12回）エイズ対策を主体とした国際コースは少ないため、会議中にも将来の応募を希望する人達が見られました。

非常に嬉しかったのは、コース卒業生が数多く参加していたことです。会議中もエキシビションでエイズ研修のスタッフ、国際協力部兼対策支援部の小原氏の力も借り、エイズ研修の卒業生や、TB/HIVの研究と対策に関する交流の場となりました。



また、結核分野での国際人口移動と関連した取り組みの、エイズ分野での応用を試みている厚生労働科学エイズ対策研究事業石川班「アジア太平洋地域における国際人口移動から見た危機管理としてのHIV感染症対策に関する研究」も、口頭1演題 [Possibilities and Limitations of a Regional Approach to HIV/AIDS among the Migrant Population in Asia-Lessons from the European Experience district Abstract SuE03-01] を含む3演題を本学会で発表しました。さらに、石川信克副所長とCARAM Asia代表のウォルファー氏の司会にて、移民送出国及び移民受入国において活動している非政府組織 (CARAM Asia, SHARE, ACHIEVE, MAP Foundation), 並びにUNDPからの代表者もスピーカーとして迎え、移民におけるHIV/AIDS対策に関するサテライト・シンポジウムを7月3日夕に160名の参加を得て実施しました。今後、結核分野と同様にエイズ研修の卒業生の専門家ネットワークが作られて、人権を尊重しながらの効果的な人口移動に対応した感染症対策に貢献することが期待されます。



会議を終えて

2005年は、世界のエイズ対策にとって極めて重要な年です。国連エイズ特別総会の政治宣言で、各国が自らの国家目標に沿って実施した対策の成果を報告することが求められている年であり、世界保健機関(WHO)と国連合同エイズ計画(UNAIDS)が進めている、「3 by 5 イニシアティブ」(2005年までに途上国の300万人に治療を普及する計画)の成果が評価される年でもあります。国連合同エイズ計画(UNAIDS)の報告によれば、2004年のアジアにおけるHIV感染者は820万人と推定され、02年末以来100万人増加しているそうです。エイズウイルス(HIV)感染の予防や治療が現在のレベルのままだと、2010年には感染者が推定1780万人に達するとの報告書も発表されています。しかし、対策を進めれば2010年時点で感染者を1020万人に抑え、年間新規感染者を220万人から60万人に、死者は100万人から60万に減らすことができるとも推定しています。

今回の会議をきっかけとして、私たちが今何をすべきかを考えて行動していくことは、日本はもちろん、アジア・太平洋地域全体の将来に大きな影響を与えることでしょう。日本は先進国の中で唯一HIV感染者の数が増えている国で、2004年に、新規HIV感染者、エイズ患者数は初めて1000人を突破し、累積数は1万人を超えました。HIV感染者の中で若者が占める割合が大きいことも深刻な問題です。

7thICAAPでは結核予防会もエイズ予防財団と共に"co-organizer"としてプログラムにリストされており、また厚生労働省が組織した支援委員会にも参画しております。チェンマイで1995年に開催された第3回会議の際は、結核研究所が直接組織委員会と連絡をとって、森先生、石川先生が座長を務め、非常に興味深いセッションをいくつも持たれました。今後もエイズ会議における結核分野の内容の質を上げるために、結核研究所のような組織の協力が必要と思われます。2004年4月より、研究部HIV結核プロジェクトが発足しておりますが、今後とも継続して貢献できるように頑張りたいと思います。

最後になりましたが、いつもお世話になっている島尾忠男会長をはじめとするエイズ予防財団の方々に深謝いたします。